

---

## ベルクソン『創造的進化』における物質的世界と芸術作品

持地 秀紀

---

発表要旨集掲載のものとは内容が異なります。

### 発表要旨

『創造的進化』（以下、『進化』と略記する）において、ベルクソンは肯定的にせよ否定的にせよ、われわれを取り巻く物質的世界を一つの芸術作品として捉える視座に立っている。この物質的世界と芸術作品の関係は『進化』に特有の説明方式であり、同時に一種の芸術論としても注目するに値しよう。本発表の目的は（1）ベルクソンが物質的世界をどのようなものとして捉え、（2）その物質的世界の創造が如何に芸術との類比によって論証され、（3）かくして類比的に取り扱われる物質的世界と芸術作品に対するベルクソンの理解を明らかにすることである。

ベルクソンは存在するものの本質を持続に見出し、物質的世界におけるその現れを、われわれが内的に知覚することのできる対象である意識に求めた。これに対して、われわれにとって外的な物質的諸存在は、持続とは逆の性格を有するものとして捉えられている。しかしながら、ベルクソンの理論は世界における意識と物質の関係を、一方を実在、他方を非実在とするような単純な二元論的体系の内に解消させるものではない。ベルクソンが意識に対して外的に広がる物質的世界の実在を認めていることは、あの有名な砂糖水の例えからも明らかである。科学者が物質同士の結合を数式上で瞬時に導き出すのとは異なり、砂糖が水に溶けるのをわれわれが実際に待たなければならないのは、それら物質的対象が意識と同様の実在原理を基盤に現象しているからに他ならない。この待たなければならないという経験が、ベルクソンの実在理解が意識に局限されたものではなく、外的な物質的世界にも押し広げられているということをわれわれに示している。

かくして物質的世界はその根底に通底する意識的な持続によって実在が認められるが、では如何にして物質がその根底において意識的持続を携えているということが論証されるのか。ベルクソンは意識と物質とを、前者の様態を「運動」、後者の様態を「不動」として、相反する存在様態において考察している。しかしながら、両者は二元論的に対置されることなく、意識的な運動の「停止」(arrêt)乃至「中断」(interruption)から不動なる物質的諸存在が派生するといったかたちで一元論的な関係の内に解消される。ベルクソンは『進化』で度々画家が絵を描く活動に言及しているが、それによると画家が絵を描く行為はカンバ

スの上を横切る一つの運動であり、かかる運動の痕跡として残った線や色彩によって作品が形成される。物質的世界における意識と物質の結びつきも同様の観点から論証することができよう。すなわち、物質とは意識的な持続が停止や中断したところに創造されるものなのであり、これによって物質的諸存在が意識と不可分に結び付けられるのである。

以上の見解を辿れば、ベルクソンにおいて物質的世界と芸術作品は構造上類比的な関係に置かれることになる。しかしながら、ベルクソンは芸術作品において認められるような根源的な躍動の現れを物質的世界に対しては認めない。芸術作品においては「制作のはたらき」(le travail de fabrication)と「制作されたもの」(l'objet fabriqué)との間に一致がある。つまり、画家の運動によって創造された芸術作品において、キャンバスを彩る物質的諸要素の各々は自己完結的な在り方をしておらず、それらは互いに次に連なる諸部分を表象し、全体として躍動している。ここでは依然として根源的な運動が凝固することなく、後に残った作品の上でも継続させられているのである。これに対して、物質的世界における「制作のはたらき」と「制作されたもの」との関係は不一致の状態にある。言い換えれば、そこには「いやしがたいリズムの差異」が存しているのである。同一の構造上で類比的に論じられる物質的世界と芸術作品との相違点はここに見出される。すなわち一方の芸術作品では物質においても躍動が存続していたのに対し、一方の自然界においてはその大半が物質へと没入してしまっているのである。

本発表においてわれわれはベルクソンにおける物質的世界と芸術作品の関係を巡って考察し、両者が同一の構造上で類比的に論じられていること、そして、それにもかかわらず両者の物質的な現れには相違が見出されていることを明らかにさせた。ところで本議論に関連する重要な概念として、ベルクソンは物質の側の「自発性」(spontanéité)について触れている。この概念がベルクソンの著作において主題的に論じられる箇所は極めて少ないが、しかしながらこの概念によってベルクソンにおける芸術論の新たな側面が開かれ得るのではないかと考えられる。何故なら芸術とは、単に芸術家の運動によって制作されるものではなく、かかる運動と分かちがたく配置された物質の側の運動との総合の上に成り立つものだからである。芸術を考察するにあたり偶然性が意義をもつのはまさにこの故にではないだろうか。以上の観点からベルクソンにおける物質的世界の理解を一つの芸術論として構築していくことが今後の課題である。

(上智大学)